

[メールマガジンに登録する](#)

個性豊かな教師たち

既存の概念にとらわれず生き生きと教鞭をとっていらっしゃる先生の素顔に迫ってみたい そんな企画が持ち上がった矢先、テンプル大学ジャパンに名物先生がいるとの情報を得て、早速お邪魔しました。テンプル大学ジャパン 芸術・コミュニケーション学部助教授 渡部真也先生のお話をお楽しみ下さい。

チャレンジする先生

「ディベートの授業があるよ」そんな一言から、いまどきの学生の反応を知りたくて、早速授業にお邪魔してみました。そこには能動的に英語で論理を組み立てようと努力する学生の姿と、そんな学生に真摯に向き合う2人の熱い先生の姿がありました。

テストセンターツアー

このコーナーでは、アール・プロメトリック(株)のご協力により、全国のテストセンターを順次紹介してまいりました。(南麻布会場は、テンプル大学のご協力により紹介いたしました。)
シリーズ第4回目は、日本最北のテストセンター「札幌テストセンター」でした。

個性豊かな教師たち

～ テンプル大学ジャパン 芸術・コミュニケーション学部 助教授 渡部真也 先生 ～

既存の概念にとらわれず生き生きと教鞭をとっていらっしゃる先生の素顔に迫ってみたい-そんな企画が持ち上がった矢先、「[テンブル大学ジャパン](#)(東京・港区)に名物先生がいる」とお聞きし、早速お邪魔しました。渡部真也(わたなべしんや)先生は、ジャケットにリュック、チノパンといったラフな格好で現れ、そのまま自然体で語りはじめました。情熱は充分にもちながら、押し付けがましいところがない雰囲気はご本人の生き方を表しているようです。



(この記事は、2001年11月22日に配信されました。)

渡部真也 氏 プロフィール



1967年生まれ。

20代を米国NBC News、ロイター通信社などでブロードキャストジャーナリストとして過ごす。

1992年から、映像作品だけでなく、写真を中心としたインスタレーション表現を始め、1996年、テンブル大学の美術校であるTyler School of ArtでM.F.A.を取得。

1999年には、個展だけでなく、Resfestデジタル映画祭、水戸美術館短編映画祭などで作品が上映され、福岡ユタカ氏、井上艦氏らと、佐賀町エキジビット・スペースにて音楽家と映像作家による即興コラボレーション・コンサート。

2000年には、2つの個展、モスクワで展覧会、Next Frame国際学生映画祭、東京デザイナーズ・ウィークなど精力的に活動中。

はじまりは、「JAZZを愛する心」だった

渡部: 僕は高校時代、JAZZの本場を訪れたい一心で渡米を思い立った。しかし、高校での英語の成績は「10段階で2」、英語のテストの度に13点を取り、「ゴルゴサーテイン」とあだ名がつく程だった。数学や理科の成績はすごく良かったのに、進級時にはいつも英語力がネックになっていた。

「渡米には交換留学がてっとり早い」と、とある交換留学制度に応募したが、「渡部くん、君のことみんな推したいんだけどちょっと英語がね」と英語力を理由に落とされた。面接に来ていた女の子のなかで英語が上手な子がいた。聞けば「松本高等英語専門学校というところで学んだ」というので、僕も早速、松本高等英語専門学校の夜間部へ通学し、



一定の英語力を身につけた。ここの学生は高校生から社会人まで、本当に情熱的に英語を伸ばしたい人々が集まっていた。

帰国して高校に戻れば1年遅れてしまうし、大学へ行こうとすれば帰国子女枠でしか受験できない。親は「日本人なんだから普通の大学へ行ってくれ」と言ったが、夏休み、たまたま渋谷を歩いていたらテンプル大学ジャパンの前を通りかかり(当時、テンプル大学ジャパンは渋谷にあった)、「へえ、こんな大学があるんだ」と知った。「ここだったら4月まで待たなくても入学できる」ということで、当時設立3年目だったテンプル大学ジャパンへ入学を決めた。親はあきらめたのか特に何も言わなかった。

結果は正解だった。「親は日本人だが帰国子女として日本の大学には行きたくない」という学生が沢山いて、英語を普段使うには非常に良い環境だった。アルバイトで通訳を始めたが、当時としては割も良く、それが仕事になっていった。気がつくやうに、学内で同じようなバイトをしている仲間5人と知り合っていて、カフェテリアでバイトの情報交換をしたり、複数でこなすバイトの仲間を見つけたり。

やがて、その中の一人がNBCニュースの東京支局で夜間のバイトを始めた。丁度、昭和天皇の崩御というタイミングで、ニューヨークから200人のスタッフが東京支局へ来ることになったとかで、通訳兼コーディネーターとしての3週間のバイトを彼からオファーされ、引き受けることとなった。ホワイトハウスのチームについていたが、日本語ができるのが僕だけだったので、取材のブッキングなども自分がやることとなり、とても良い経験になった。

バイト期間が終わり、支局に精算に行ったら、アジア支局の総支配人から「来月空くポジションがあるので来ないか？」と言われた。彼は僕が即座にOKと言うと思ったようだったが、「私は、もともとテレビの仕事には興味がなかったの、ちょっと考えてもいいですか？」と返事をした。当時僕は20歳だったが、大学でどうしても勉強してみたい、と思うものがなく、それが不満だった。大学での2年が終わろうとしており、「ちょっと就職してみても、その後何かしたいか考えてみるのもいいか」と、結局その誘いを受けた。2年のつもりの契約が4年半になった。

アメリカの大学で学んで

渡部：NBCニュースでの4年半は非常に充実したものだ。

僕は映像に向いている人間であること、しかしニュースにするためではなく自分のために映像を作りたいと思っていること、を気づかせてくれた。そこで、「一度、映像もだが、映像以外のアートについてもきちんと学んでみたい」とアメリカの大学で学ぶこととした。僕がアメリカの大学へ進学することを聞いたNBCニュースの同僚は、「あのねえ、きみのために言っておいてあげるけど、きみは世界の3大ネットワークの1つ(NBCニュース)で仕事をしていて最新の機材と技術を使ってたんだよ。いまさら大学に行って映像を勉強してもきっとそこではベトナム戦争の時の機材を使い、きみの最初の先生は大学院生で、卒業したら、NBCニュースみたいなところに就職できればいいなあ、と思ってる人々になると思うよ」とアドバイスしてくれた。

一旦はニューヨーク大学への入学を考えたが、経費、ロケーションのバランスから、アメリカでもテンプル大学の映像科で学ぶこととなった。仕事場の同僚が予言した通りのことも実際にあったが、NBCニュース時代に実践的に学習したことを理論建てて体系的に学ぶことができたこと、専攻以外の科目も比較的自由に選択出来たこと、は本当に良かった。元々興味があったアートの科目を沢山とり、映像専攻、アート副専攻で卒業した。

大学卒業後どうするかを考えた。映像科の教授は、「卒業するまでに何故自分が映画を作らなくてはいけないのかがわかることが第一の目標で、第二の目標は自分が作る映画は他人が作る映画とどう異なるのかがはっきりわかることだ。この2つがわかれば映画作家になれるだろう。」と言った。芸術学科の教授は、「アーティストになりたいならニューヨークへ行け。

先生になりたいなら大学院へ行け。」というシンプルな進路指導だった。こういうあたり、アメリカの教授はざっくばらんだ。映像、アートを学ぶ学生よりも先生の方が気ままで変わっている、ということもできる。アメリカの高校での先生との距離とはまた少し異なり、フランクに教授と議論できる雰囲気素晴らしい。

就職をせずもう少し自分の作品を作りたかったので、大学院進学を考えた。ただし、大学時代に貯金を全て使い果たしていたので、学費の捻出がまず大きな問題だった。大学の教授は「大学院へのアプリケーションのカバーレターにはお金がないとはっきり書け、そうしたら学費を免除してでも君を欲しいところが回答してくれるだろう」とアドバイスしてくれた。どこの大学院へ行くかについては、教授は教え子をどの大学院へ送ったかが自身の評価となることもあり、「Master of Fine Artsの資格をとるなら、なるべく名前の通った良いところへ行け。その方が良い学生にも会えて間違いなく刺激になる。」という分かり易い方針だった。



結局、映像、芸術の分野とも五指に入るテンプル大学大学院から「1年間の学費免除、学部生に対する授業を条件に給料を支払う」という有り難いオファーを受け、結局、大学院もテンプルへ進学することにした。授業料を免除してもらっていたこともあり、大学院生の学部代表を1年生の時から卒業するまで務め、その縁で職員会議へ出席していたのと、学内で色々なバイトをしたので、大学のシステムについて知らず知らずのうちに多くのことを学んでいた。この

時のキャンパスの知り合いがその後テンプル大学ジャパンの学長として就任し、結局彼に誘われるままテンプル大学ジャパンにて、初の芸術科、コミュニケーション科両方の教鞭をとることとなった。

今も、テンプル大学ジャパンで教鞭をとる傍ら、夏休みなど長期の休みには契約ベースで映像制作やアート関連の仕事をしている。日本に帰ってきて一年目、マッキントッシュを用いて映像を編集するシステム、アビットをつかって映像の開発を行う仕事をした。テンプル大学映像科時代、アビットがまだ普及する前に大学がアビットのノンリニア・システムを導入したので、自分なりに試行錯誤してこのシステムを使いこなせるようになった経験があり、授業でも一通りのことを習っていたので、アビットの使用法を他人に教えることでかなりの収入を上げることができた。結局、大学院の学費は免除してもらったものの、生活費、制作費などは銀行から借金をせざるを得なかったが、アビット関係で上げた収入で1年もせずに借金を返済することができた。今、テンプル大学ジャパンの授業でもノンリニアのシステムを使った制作について教えている。

「ライフスタイルをありのまま見せる」授業

渡部：振り返ると、アメリカの大学では教授と学生はフランクに議論が行える関係でありながら、教授は皆その道のプロで授業は非常に実質的だった、と感じている。

例えば、ジャーナリズムの授業では、ついさっきまで局に転がっていた、最新ニュースを伝えるテレックスイヤーが生徒に手渡され、「15分で記事にして」と言われる。映像の教授は自分がさっきまでスタジオで編集していた番組や作品を見せてくれる。アートの教授は自分の個展会場へ連れて行き、自分のスケッチや資料などを学生に見せたり、画廊との金銭的な契約トラブルについて生々しく語ってくれる。学生でありながら、実社会の仕組みについても自然と知識がついてくる。つまり、「ありのままを学生に語り、見せる」授業なのだ。それが自分にとって何より参考になったと思う。

それでも大学院へ入学したての時、ある教授はこう言った。「僕は君に何も教えてあげられないと思う。ものを人に教えてあげることができる、という考え自体が幻想だと思うんだ。その代わり、君が望めば情報をどんどん与えることはできる。その情報が必要ならどんどん

使って欲しい。でも一番重要なのは、わかっていると思うけれど、君がどう感じ、どう動くか、なんだよ。」当時は何を言われたのかよくわからなかったが、今ではよくわかる。

僕も今、同じように学生に接していると思う。

「写真のある技術だけを勉強したい」という学生には「申し訳ないけれど、その技術だけを教えたくはないんだ。もしその技術だけが知りたいなら、僕の授業はとらないでくれ。」と言う。学生には、まず自分が何を作りたいのかを考えてもらって、その上で技術を勉強してもらおうのが僕の方針。短絡的なツールの使い方ではなく、そのツール自体がどういうコンセプトによりデザインされているかを考えながらツールの使い方を覚えてもらう。そして、自分の作りたいもののイメージが分かってくれば、技術を覚えるのも早い。授業というのは、とにかく色々な可能性を見せていく場所。学生は大きな庭を持っているのだと考え、在学中は一粒でも多く種を持って帰って欲しい。何事も基礎が重要で、種(基礎)が丁寧に蒔かれていれば、花(応用)は水の撒き次第で容易に咲く、と思うから。



大切なのは、「英語を使って何かを勉強する」こと



渡部：アメリカ人の学生も日本人の学生も大して変わらない、と考えている。ただ、日本人は小中高の教育で、自分の意見を言わないことを学ばされている、という点では被害者だと思う。大学生になっていきなり「自分の考えを言え」と言われるのは酷なことだと思う。こういうカルチャーショックをどうやって取り除いてあげれば良いかを、よく考える。

英語について言えば、「英語は勉強するものではなく、英語をつかって何かを勉強する」ということが、英語力を伸ばすための鍵だと信じている。

勿論最初からいきなり英語が使えるようになる訳ではないから、最初にある程度、英語を勉強する必要がある。しかし、その後、勉強した英語をどう使うか、は自分なりに実践で学ぶものだ。そのために、英語を用いて、何か他のことを勉強するのがベストだと考えている。これからも僕のために、そして学生のために。ありのままに、楽しみながら授業をしていきたい。

(聞き手：TOEFL事業部長高田幸詩朗)

[Back to top](#)

■ チャレンジする先生

～ 早稲田大学 David Shapiro 先生・大野秀樹 先生～



Debateの授業があるよ」そんな一言から、いまどきの学生の反応を知りたくて、早速授業にお邪魔してみました。そこには能動的に英語で論理を組立てようと努力する学生の姿とそんな学生に真摯に向き合う2人の熱い先生の姿がありました。

(2001年10月15日 インタビュー)

(この記事は、2001年11月22日に配信されました。)

先生方のプロフィール



David Shapiro

現職： 流通経済大学助教授。早稲田大学非常勤講師。和英辞典の編集者。コンサルタント。

職歴： 総合商社アメリカ法人の社長補佐。日本の金融機関の顧問。国際経営コンサルタント。その他。

学歴： Undergraduate(Brandeis大学；哲学)

Graduate (Columbia大学、日本研究センター；日本研究)

著書： 「菊とサラブレッド」(エッセー集、ミデアム出版)、「雨のちミミズ晴れ」(ファンタジー、情報センター出版局)、「ハリイの山」(絵本、プロンズ新社)

その他： 芝居「サイモンSAYS」の日本公演など。



大野 秀樹

現職： 早稲田大学・語学教育研究所助手

学歴： 広島大学大学院・教育学研究科博士課程(後期)満期修了

専門分野： 英語教育、コミュニケーション学

現在の研究： 日本の英語によるディベートの史的研究

debateの授業？

今年9月中旬札幌市で開催された学会で、早稲田大学語学教育研究所の大野先生と知り合った。大野先生はコンピュータ版TOEFLの紹介セッションに参加されていて、TOEFLメールマガジンの話となり「私は卒業生なのですが、ええ？今はdebateを英語の授業で取り上げてるんですか！時代は変わりましたね。是非今度取材させてください」とお願いしたところ、ともにdebate授業を持たれているShapiro先生の承諾をとってくださったため、10月26日、秋が深まりつつある早稲田大学の10号館教室を訪問した。

大野先生は機材をかついで教室へ。授業風景をビデオに収録し、後から反省材料とされるのだそうだ。授業開始時刻を過ぎ、その日は男子学生だけだったが28名ほどパラパラと教室へ集まってきた。3~4名で一つのチームを作って席につき、紙を片手に何やら話している。聞けば、debateのテーマ (proposition : 「論題」) は「お台場にカジノを作るべきか」であるとのこと。授業の正式名称は「英語III」、この授業は通年のクラスで今日は後期の4回目にあたるそうだ。ちなみに前期のクラスの論題では日本国憲法の9条が焦点で、この論題は2つ目のものだそうだ。

いよいよ授業開始



そのような状態の中、Shapiro先生が登場し、淡々と出席をとり始めた。このクラスの出席率および人気度は他のクラスに比べてかなり高いとのこと。Shapiro先生は4年前からこの授業を扱っているが、4年前の6名から今年は38名と登録学生数は確実に増加傾向にあるらしい。出席している学生のにこやかな表情からも確かにこの授業の人気を窺い知ることができる。

さて実際にどのようなスタイルで授業が展開されるのか、興味深くShapiro先生を観察していると、論題に対して賛成あるいは反対の小グループを形成させ(既にグループ割りは前回のクラスで決まっている)、グループ毎に各々の意見の裏付けをはかるように指示すると、Shapiro先生は黒板に黙々と以下の内容を書き出した。(一部のみ抜粋)

Opening

- State your strategy
- Decisive Issues
- Evidence, benefits and drawbacks should be mentioned

Pro: state what must be done to establish the proof of the proposition

Con: state what must be shown to prove the proposition is false

-
- What will the casino cost to build?
 - How will it be paid for?
 - What has been the experience with casinos in other places?
 - Economic benefits?
 - Social negatives?
 - Expert opinion?
 - What are the economic results of others?

激論を交わす学生たち

Shapiro先生が黒板に向かっている間、学生たちはチーム毎に自分たちが調べてきた参考資料を基に、テーマである「お台場カジノ建設」の是非に激論をかわしている。

その間を練り歩いて、学生たちに的確なアドバイスを与えているのが、もう一人の先生、大野先生だ。大野先生は、Shapiro先生が板書した内容をサポートする形で、各チームが議論を組み立てる際のポイントについて教えている。

学生たちもまた若い大野先生に相談しつつ自分たちの論理を固めるのに必死だ。

大野先生はよき相談役という印象。この時点でクラス全員の前で発表するためか、英語での発表の練習を始めている学生もいる。

授業の最初から感じていたが、Shapiro先生は大変流暢な日本語を操られる方で、英語と日本語を交えつつ、メリハリを効かせてクラス展開をしようとしていることが理解できた。

また、このクラスの真の目的が、英語力の向上うんぬんではなく、「学生の自主性を重んじる、すなわち、自分が下調べしてきたこと、自分が言いたいと思うこと、を堂々とみんなの前で主張できるか」という点にあるのだろうと感じた。

さて、各グループが20分から30分ほど話し合った後、賛成派、反対派それぞれ1チームづつの発表を聴くことができた。賛成派について言えば、主に経済効果の点からカジノ建設に賛成というものであったが、発表の後Shapiro先生から、財源の問題、具体的な数値を用いての経済効果の証明など反対派から反論されそうな点を次回の授業までに論理補強しておくように、との鋭いアドバイスがあった。このようなアドバイスを踏まえ、学生たちは次回までにさらに下調べを行うなど、前向きに授業の準備を行うこととなる。



以上今回、debateの授業を拝見し、Shapiro先生、大野先生とのお話の中で、「学生自体の「価値観・世界観」そのものの転換を感じる」との発言が印象に残った。

「最近の学生は頭をつかうことは嫌いではない」と断言するShapiro先生の言葉とともに日本語、英語は関係なく、「発言をしたいと思う気持ちが全て」と語るShapiro先生のもとで、能動的に授業に取り組める(取り組まざるを得ない?)学生を目の当たりにし、大学を卒業して十数年が経過した私は「自分は大学時代こんな前向きな気持ちで授業に臨んだことがあったっけ?」と、正直羨ましく、昔を思い出していた。

学生感想

後にこの授業を実際に受けている学生に直接、以下の質問をぶつけてみたので反応を記しておく。当初、その場で質問を投げて反応がないのでは、と思い、アンケート用紙を配布してほしいとしていたが、Shapiro先生から「反応があるかないかは質問してみないとわからないよ、どうぞ」と促され、思いきって質問してみたのだ。

「他のクラスとの違いは何か?」

「言いたいことが言えるようになったと思うか?」多少驚いたのだが、学生からしっかり反応が返ってきた。

他クラスとの違いについては、まず外国人の先生に指導してもらえるという点で興味を惹かれたと答える学生がいた。また「授業の性質上どうしても学生が主体的にならざるを得ない点、ゼミっぽくてアットホームな雰囲気が良い。英会話ではなく議論の仕方を身体で覚えることが出来て良い」と答える学生もいた。

下調べについては、確かにしんどいこともあるがそれを行なうことで積極的に授業に参加できるという認識をほぼ全員の学生が共有していた。

何よりも言いたいことが英語で少しづつ言えるようになっていく過程が楽しいんだ、と答える学生も多く、これら学生の将来を末頼もしく感じながら、すがすがしい思いで大隈公を背に早稲田大学を去った。

論題の選定、授業の流れ

この授業では論題は学生のリクエストに基づき、多数決投票で決めています。前期は1つの論題をこなし、後期はこのカジノ論題に合計7回の授業を充て、その後2月上旬までの8回の授業では教育問題の論題(未定)に取り組む予定だそうです。授業の流れとしては原則として、クラスで6つのチームが作られ(1チーム4~5)、1回の授業では否定、肯定双方の2~3チームが「立論」し、翌週は残ったチームが立論し、前週の「反論」、というようにdebate特有のスタイルで発表が進み、毎回の授業の位置付けに応じて、シャピロ先生の板書内容も変わっていくそうです。クラスの全員が発表する機会がある授業なのです。

大野先生のフォロー

前期は、論題の選定、初顔合わせとなった学生が円滑に授業に入るように英語で自己紹介を行ったり等に多少の時間を割いたため、学生は多少、反論の方法など情報不十分な点があったように感じたそうです。大野先生は前期の反省を踏まえ、学生の電子メールアドレスを集め、メールを通じて、情報検索の方法、反論の仕方、スピーチの構成等、授業内容の補足を行なっています。う~ん、「さすがIT時代」と思ったのは筆者だけでしょうか。

(聞き手：TOEFL事業部長 高田幸詩朗)

[Back to top](#)

■ テストセンターツアー

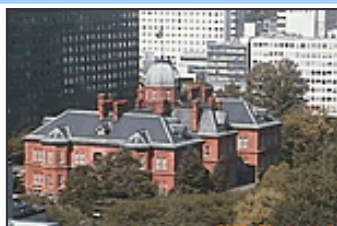
～ 第4回：札幌テストセンター（2002年5月末をもって閉鎖されました）～

このコーナーでは、アール・プロメトリック株式会社のご協力により、全国のテストセンターを順次紹介してまいりました。（南麻布会場は、テンブル大学のご協力により紹介いたしました。）シリーズ第4回目は、日本最北のテストセンター、「札幌テストセンター」でした。



（この記事は、2001年11月22日に配信されました。）

好きです、さっぽろ！



今回のテストセンター紹介は、前回の南の島「沖縄」から日本列島をひとつ飛び、北の大地、北海道は札幌会場です。

さわやかな夏はもちろん、燃える秋の紅葉、白銀の世界と1年を通して楽しめる北の大地。時計台の鐘が鳴る札幌で、観光ついでに受験もしてしまうというのはいかがですか？

目印は、回るスカイラウンジのあるセンチュリーロイヤルホテル

試験会場は、JR札幌駅南口から徒歩5分、展望スカイラウンジのあるセンチュリーロイヤルホテルと同じビルの8階にあります。（ご案内は住友生命ビルとなっていますが、ホテルと同じビルです。）交通の要のJR札幌駅から近いので、札幌以外からお越しになる方にも非常に便利でわかりやすい場所となっています。

また、JR札幌駅と地下鉄さっぽろ駅のどちらからでも地下街を歩いてアクセスできるので、雪が降ってしばれる日には非常にうれしいですね。地下街には飲食店もたくさんあるので、そこで最後の準備を整えたら、試験開始の30分前までに余裕を持ってテストセンターにお入りください。

平日がすいている！

札幌テストセンターは、日曜日、月曜日と祝日を除く、火曜日から土曜日に試験を実施しています。試験は午前9時からと午後2時からの2回行われています。

テストルームは6席で、週末や月末には満席になる事もしばしば。比較的空いている平日の方が人の出入りが少なく、より落ち着いた雰囲気の中で試験を受ける事ができるでしょう。

北海道は、やっぱり温泉！

テストセンターでは、お米（特に道産）にはちょっとうるさい道産子のスタッフAと、北海道が好きで東京から移住してきた、ニセ道産子のスタッフBの2人がお待ちしております。受験生の皆さんが、実力を十分に発揮して受験できるようお世話いたします。特に初めての受験の方は、わからない事がありましたら遠慮なくお聞き下さい。2人とも温泉が大好きなので、温泉に関する質問にも答えてしまうかも？



もちろん、温泉情報ではなく試験情報の詰まった各種プリテンも用意しておりますので、ご自由にお持ち帰り下さい。

Boys, be ambitious!



北海道のチャレンジ精神の象徴"**Boys, be ambitious!**"の北海道大学はテストセンターのすぐ近くです。試験が終わったら北海道大学まで足を伸ばして、クラーク博士の胸像の前で次の目標への誓いを立てるのも良いでしょう。

えっ、北大生はどうしたら良いかって？ もちろん、時々本尊？のある羊ヶ丘に行って誓いを新たにしましょう。

ご自分の可能性を信じてチャレンジする受験生の方々を、札幌テストセンターのスタッフは心から応援しています。

(聞き手：TOEFL事業部)

[Back to top](#)